

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 張 天 新

本論文は、日本の近代としにおいて形成されてきた都市周縁地区を対象として、周縁部空間の形成過程、空間構成、景観様式を考察し、日本の伝統的空間理念と近代都市計画理念とがいかに関わりあひ、周縁部の特徴的な有機的都市デザインの方法が生成してきたかを導き出すことを目的としている。

論文は序章と結章のほか、主要部分は3部から成っている。

研究の目的や位置づけを述べた序章に続く第1部は、周辺部空間に関する理論研究であり、第1章において周縁に関する用語の分析及び意識調査から内縁と外縁の関係のパターン分類をおこない、「裏、間、表」という日本古来の概念を用いて周縁部空間の多義的意味と構造を解析している。続く第2章では、都市の性格別に周縁部空間のパターンを4分類して考察し、東京において内包的周縁複合体が形成していることを示している。第3章では、周縁街区の形成プロセスを境界河川沿い、河口、池をそれぞれ中心とした3タイプに分類することができることを示している。

第2部は4、5、6章の3つの章から成り、東京周辺区部の周縁部を3箇所取り上げて、周縁複合体の形成過程を詳細に論じている。第4章では、浮間、水元、六郷の3地区を比較しつつ空間形成の歴史を追っている。それぞれ荒川、小合溜、多摩川の水辺地区にある。いずれも活発な活動を有していた河川や水路が分断された残滓を有しており、これが特徴ある周縁部の複合的な空間を形成することに寄与していることを示している。第5章では、これら水辺空間が日本の古典庭園に見られる半自然的様式を受け容れつつ内縁部自然空間の人工的空間核と自然的空間核の二元型空間核を有する景観構造を持っていることを示している。第6章では、第5章の考察を主として土地利用を中心に振り返り、空間構成の特徴を再び明示している。

第3部は第2部のケーススタディに基づいて、周縁部の空間構造パターンを二元的空間核（第7章）、回転型街区空間構成（第8章）、ならびに共用型複合体（第9章）という3つの概念を用いて理論的に分析し、それらによって生成される有機的都市計画原理を明らかにしている。

結章において、各省のまとめをおこない、結論として以下の3点を列挙している。

第一に、日本の都市周縁部は、自然空間文脈と人口空間文脈の中に位置し、双方が生態、景観、産業、生活の面で複合することによって形成されており、「表、間、裏」の異質空間が共存した構成を示していること。

第二に、周縁部空間では境界空間に対応し、空間文脈に順応し、生活様式を継承するこ

とによって二元的空間核、回転型街区、共用型複合体が形成していること。

第三に、周縁部空間は日本の伝統的空間理念と近代都市計画とが相互に作用しあって形成された特徴的な空間であり、「境界、文脈、様式」が都市デザインの言語として活かされており、曖昧性・混在性・柔軟性を有し、自己完結、自己組織、自己形成という有機的な空間形成のパターンを明確に示していること。

本論文は、これまで都心部や農村部と比較して見過ごされてきたそれらの境界領域に積極的な意義を見出し、ケーススタディを通じて都心部を中心に展開されてきた近代的都市計画の技法や理念とは異なる空間原理が現在に至るまで生起してきており、今も残されていることを明らかにし、これらを通して日本的な有機的都市計画原理のあり方に大きな示唆を与えるものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。